室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

『刻うどん』にあって『時そば』にないくだり：暑けりゃ肌脱げ、寒けりゃ袷着

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): 刻うどん, 肌脱げ, 袷着, 弘法大使, ちょんまげ キーワード (En): 作成者: 福盛, 貴弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008870

北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 14, 179-194, 2016.

『刻うどん』にあって『時そば』にないくだり
― 暑けりゃ肌脱げ、寒けりゃ袷着 ―

福盛　貴弘

The Matter of Story Is Not in '*Toki-soba*', Although It Is in '*Toki-udon*'.

Takahiro FUKUMORI

要旨：『時そば』は上方落語のネタ『刻うどん』を三代目柳家小さんが翻案し、江戸落語に滑稽噺として定着させた。その際に『時そば』に移植されなかった、換言すれば『刻うどん』にしかないくだりの一つを本稿で扱った。本稿で取り上げたくだりは、うどん屋をほめる前にいじるくだりである。このくだりを理解するために必要な知識や背景をふまえて解説することが、このエッセイの主たる目的である。

キーワード：刻うどん　肌脱げ　袷着　弘法大使　ちょんまげ

1.　序

古典落語として有名な『時そば』は、もともとは上方ネタである。三代目柳家小さんが上方落語『刻(とき)うどん』[1]を翻案し、江戸落語『時そば』として作り上げた。江戸落語は人情噺、上方落語は滑稽噺が多いことは桂米朝[2]や桂歌丸[3]など多くの落語家が語っていることであるが、明治期に意欲的に上方ネタを江戸落語に移植し、底の浅いくすぐりに終始するのではなく滑稽話の深みを高めたのは、三代目柳家小さんの功績の一つと言える[4]。

まずは噺を知らない人のために、『刻うどん』の筋を確認しておく。

> ひやかし帰りの 2 人、腹がへったが両人の懐中を合わせても 15 文しかない。これで 1 杯 16 文のうどんを食おうと企む。

---

[1] 「刻うどん」「時うどん」という両表記があるが、本稿では参照資料となる東西落語会が開催された時の表記に従い、「刻うどん」で統一した。よって、他意はない。
[2] 桂米朝(2002, 2004)など多くの書物で記されている。
[3] 筆者の記憶の範囲で新しいところでは「噺家生活 60 周年記念興行」（浅草演芸ホール、2011 年 5 月 15 日）で話された記憶がある。
[4] 興津要（2004：161）

しっかりしたほうの男（清八：筆者注）がうどん屋との交渉を担当。銭を払う時になって「ひとつふたつ 3 つ 4 つ 5 つ 6 つ 7 つ 8 つ……今何刻や？」うどん屋が「9 つで」、「10、11、12、13、14、15、16」というあんばいで 1 文ごまかす。

この妙技に感心した頼ンないほうの男（喜六：筆者注）も、いっぺんやってみたろと翌る晩小銭をふところにうどん屋へやって来る。ゆうべの台本と同じにやろうとするのでスカタンなやりとりがあったりするが、ようやく銭を払うところまでこぎつけた。喜々として銭を「6 つ、7 つ、8 つ……」と数え、ここやと「今何刻や？」とたずねると、うどん屋が「5 つで」と答えたので、「6 つ、7 つ、8 つ……」。

桂枝雀（1996：186）

すうどんを食うには持ちあわせが 1 文足りない状況で、勘定をごまかして切り抜けるというやりとりがオチの中心になっている。このやりとりが成立するためには、当時の時間の数え方に関する知識が必要である[5]。江戸時代の時間の数え方の一つに、『延喜式』に従った数え方があり、九つ、八つ、七つ、六つ、五つ、四つでまた九つに戻るというものがある。時間の呼び方について、現在の時間、十二支での数え方とあわせて、表 1 で示す。

表 1：時間の呼び方の対照表

現在の時間	午前						午後					
	0 時	2 時	4 時	6 時	8 時	10 時	0 時	2 時	4 時	6 時	8 時	10 時
十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
延喜式	九つ	八つ	七つ	六つ	五つ	四つ	九つ	八つ	七つ	六つ	五つ	四つ

『刻うどん』の元ネタは、享保 11 年（1726）刊の笑話本『軽口初笑』の中の「他人は喰より」と言われている[6]。

「他人は喰より」
お中間おつかひに出て。さき様でひまが入つて。日はくれる。はらはへる。鎌倉がしでそば切をくひ。ていしゆ今のはいくらぞ。六文でござる。たばこ入のそこに、五文ならでなし。よもやまけはせまいとしあんして。かの銭を、一ッ二ッ三ッ。ていしゆ何時ぞ四ッでござる。四ッか五ッ六ッとかぞへてやつた

ただ、最後の 1 文をごまかすネタについては、この時期の他の書物でも記されており、『軽口初笑』が元になったのか、口承から生まれたのかについては定かではない。

[5] 極端な話をすれば、その知識がなくても、噺の流れで「○つ」が何時か分からなくても時の数え方なんだということが分かれば、オチは理解できる。時の数え方については、くすぐりで解説しておく落語家がいる。
[6] 細川英雄（1981：293）参照。

「あま酒」

仲間（ちうげん）、さむき夜に使に出、むかふから、あま酒うり来る。さらば一ぱい奢（おごろ）ふと、たばこ入の銭かぞへて見れハ、たつた五文有り。壱文のふそくハちよろまかそふと、あま酒うりを呼、一ぱい引かけ、サア銭を払（はらお）ふ。手を出し給へ。それ、壱文二文三文。なん時で有ふの。〽四つで御座ります　〽五文六文

安永 2 年（1773）刊　稲穂『学牽頭後篇（がくたいこ）　坐笑産（ざしょうみやげ）』[7]

「夜たかそば[8]」

途中にて、夜たかそはをくい、せにを見れバ七文有。なむさん、壱文たりぬと思ひ、サアぜにをやろふから、手をだした。〽そは売、アイトいふて手を出す。〽ソレ、壱つ弐つ三つ四つ。なんと今夜ハ何時だな。〽アイ、もふ五つでござります。〽ムゝ夫（それ）、六つ七つ八つ

安永 2 年（1773）刊　古喬子『芳野山（よしのやま）』[9]

オチの部分は、『刻うどん』『時そば』共に同じである。そのオチに辿りつくまでの話の運び方に違いがある。登場人物の違いは以下の通りである。『刻うどん』は、うどん屋壱（あたり矢）と清八（客・かしこ）と喜六（客・あほ）、うどん屋弐（はずれ矢[10]）と喜六のやりとりとなっている。これが『時そば』では、客同士の掛け合いはなくなり、そば屋 A（あたり矢）と客 A（知恵者）、そば屋 B（まごや）と客 B（知恵を使いこなせない者）といったそれぞれ 1 対 1 のやりとりとなっている。『刻うどん』における清八と喜六のキャラについては、桂三度のショートカット版を引用して手短に示すことにする。

まあね、いろいろしゃべらしてもらうんですけど。あのー、落語をやってますとですねえ、たまに人に言われるのが、「落語って一ネタずつ長ないか」と言われるんですが、そんなことはございません。上方落語の有名なお噺に『刻うどん』というお噺がございます。

ええ、その『刻うどん』、ご存知ない方のためにですね、最短バージョンというのが

---

[7] 武藤禎夫編（1979：102）参照。

[8] 異説もあるが夜鷹そばの夜鷹とは、当時、夜の辻々で客を呼びとめて相手をする街娼のことで、それが好んで夜そばを食べたのでいつの頃からか夜鷹そばと呼ばれるようになったというのが大方の通説となっている。夜鷹が好んで夜そばを食べたかどうかはわからないが、それだけ江戸の街々には街娼も夜そば売りも多かったということであろう。 夜鷹そばは、「かけそば」専門で、その扱いも不衛生であったが、宝暦（1751～64）の頃になると、屋台に風鈴をつけ、鳴らしながら担ぐ風鈴そば売が登場している。器なども清潔な物を使って「しっぽく」（かやくの一種）などの種ものも扱うようになっていった。
一方、大坂の街娼は惣嫁（そうか）、京都は辻君と呼んだが、上方の夜そば売りの呼び名はこれらとは関係なく夜鳴（夜泣き）うどんといった。
「夜鷹そば／夜鳴きうどん」　http://www.eonet.ne.jp/~sobakiri/sakuin/jiten-yo.html

[9] 武藤禎夫編（1979：273）参照。

[10] 店の屋号は『刻うどん』『時そば』を問わず、演者によって変わることがある。

ございまして。はい。僕が勝手にやってるんですけども。まず、それ聞いてください。『刻うどん』の内容、ストーリーは全部お客さんに伝わるように。ストーリーをぐーーーっと最短時間にショートカットしたのが、こういうものでございまして。
昔はですね、時間のことを四つ五つ六つ七つ八つと、そういうふうに呼んでおりました。

清八「おう、うどん食いに行こか」
喜六「せいやん、ちょっと待ちいな。屋台のうどん言うたら確か 1 杯 16 文やで。2 人あわせて 15 文やったら、銭が 1 文足らんがな」
清八「任しとけちゅうね。行くでえ。」

清八「うどん屋、うどん 1 杯おくれ。」
うどん屋壱「へい、お待ちどうさんで。」
清八「あ、おおきに。」
清八（ズズーッ）
清八「うどん屋、銭払うで。銭が細かいさかい、手で受けてくれるか。行くでえ。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ。うどん屋、今なんどきや？」
うどん屋壱「へい、九つでおます。」
清八「十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。おおきに、ごっつぁん。また来るわ。」
うどん屋壱「おおきに、ありがとさんで。」
喜六「ははあ、せえやん、お前うどん屋に時たずねて、1 文ごまかして、うまいことやったな。わいもあしたやってみるわ。」

あくる日、早いうちから。
喜六「うどん屋。うどん 1 杯こしらえて。」
うどん屋弐「へい、お待ちどうさんで。」
喜六「お、おおきに」
喜六（カッカッカ　ズーッ）
喜六「うどん屋、いよいよやな、銭払うでえ、行くでえ。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ。うどん屋、今なんどきや？」
うどん屋弐「へい、五つでおます。」
喜六「（エーン）六つ七つ八つ……」
と、3 文損しよったというのが、この『刻うどん』というお噺でございます。
（桂三度 2015.7.12「ショートカット」『ENGEI グランドスラム』CX 系列）

2.『刻うどん』にしかない客とうどん屋とのくだり

2.1.　すうどんを食べ始めるまで

清八と喜六の掛け合いで大笑いが起こるのは、上方落語のひつこさ全開の「ひっぱりな」

のくだりであるが、これについてはあまりに有名であり、別稿で記したことがあるので本稿では扱わない[11]。『刻うどん』から『時そば』に移植された時に全く消えてしまったのは、客が店に行くまでのやりとりである。『刻うどん』で清八と喜六がうどん屋ですうどんを食べ始めるまでの大きな流れは以下のとおりである。

①遊郭ひやかしの帰り→②都都逸→③2 人あわせて 15 文しかないことを確認
→④金が足らぬのにすうどんを食うことを考える→⑤うどん屋をいじる
→⑥うどん屋をほめる

『時そば』では、①②⑤は基本的に存在せず、割と早くからそば屋をほめちぎる。ほめる範囲は広く、看板、屋号、箸、器、麺、出汁、具というありとあらゆるものをほめている。竹輪しか入っていないしっぽくそばであるにも関わらず、江戸っ子らしく蕎麦の講釈をたれてそば屋をほめる流れは、江戸っ子の振る舞いにしてはいやらしさを感じる。このほめるという流れは、『刻うどん』の方が控えめである。

この一連のほめる流れは、柳家喬太郎の「『時そば』は客が始めからだますつもりである」という解釈[12]に沿えば、納得できる流れである。とにかくありとあらゆるものをほめておき、勘定を 1 文をごまかす言動から目をそらさせようとしているのである。

一方で『刻うどん』は、柳家喬太郎曰く「頭を使ってどうにかしようとしている」という解釈である。一直線にうどん屋に辿りつかないところに、「小腹がすいたからどないかならんのか」という意味合いが込められていると筆者は解釈している。

本節では、流れの中での④～⑤をとりあげることにする。理由は、このやりとりが『時そば』には全くないものであり、『刻うどん』のそこだけをつっこんで書いているものがなかったというだけのことである。

2.2. すうどんを食う前にうどん屋をいじるくだり

ここでは、2013 年に大東文化大学で開催した「東西落語会 ― 江戸落語と上方落語の違いを感じる ―」[13]で『刻うどん』を演じられた桂かい枝の噺を元に進めていくことにする。以下では④～⑤にかけての噺を文字起こししたものを示す。

清八「どこぞにうどん屋、うどん屋と。うどん屋がええ具合に火が出たやろ？　ごちゃごちゃ言うてたらいかんねん、黙って出てこいよ。おう、うどん屋。うどん屋。」
うどん屋壱「へい。おこしやす。」

---

[11] 福盛（2016）参照。
[12] 柳家喬太郎「落語大全集」2010/11/19『柳家喬太郎のピロウトーク』TOKYO FM
[13] 2013 年 9 月 8 日に大東文化大学多目的ホールにて開催。当日は、瀧川鯉昇さんに『時そば』、桂かい枝さんに『刻うどん』を演じてもらうという通常ではありえない落語会であった。同じ会で同じネタという無理なお願いに応じてくれた落語芸術協会に感謝している。詳細は、福盛（2016）および大東文化大学外国語学会の『外国語学会誌』43 号を参照のこと。

清八「うどん屋、暑いか？」
うどん屋壱「へい。こら暑うおまっせ。」
清八「暑けりゃ肌脱げ。」
うどん屋壱「へッ、大将、えらい古い言いぐさでんな。こらあ、弘法大師さんの頭にちょんまげ結うてた時分の言いぐさですよ。」
清八「うどん屋、暑いか？」
うどん屋壱「へッ、ええかげんでおます。」
清八「袷、着ー。」
うどん屋壱「堪忍しとくんなはれや。」

この④～⑤については、上方落語でも落語家によってこのくだりがあるかないかは異なる。筆者の記憶の範囲では、桂枝雀や笑福亭仁鶴の噺ではこのくだりをやっている[14]。実際にはこのくだりがなくてもオチには直接関係ない。ただ、笑いの浮き沈みをつけるためには必要であるかもしれないので、演じる落語家も用いるか用いないかを自身の構成力を考慮してやるかやらないかを決めているのかもしれない。なお、こういった余計なやりとりは筆者の好みである。また、このくだりは『軽口初笑』には載っていない部分であり、『刻うどん』を作った未詳の作者のセンスを感じる。そして、このくだりが口承で受け継がれているということは、このセンスに共感する落語家がいるということであろう。

2.3. 暑けりゃ肌脱げ

では、「暑けりゃ肌脱げ」から。鍋で湯を沸かしているため、店に出ていれば暑い（あるいは熱い）のは当たり前である。火が点いていて湯が沸き上がっており、すぐにでも茹でられるかどうかを清八が「うどん屋、暑いか？」と尋ねることでうどん屋壱に確認したという推測が成り立つ。うどん屋壱は準備ができてるということを伝えるために、「へい。こら暑うおまっせ」と返事をしている。そこに矢継ぎ早に清八が「暑けりゃ肌脱げ」と。うどんの注文に関わる語用論的解釈ではなく字面通りに返されて、うどん屋は虚をつかれた感がある。しかし、それに屈するのではなく、その言い回しに対して余計なひと言をつけていい返し、うどん屋壱は会話を弾ませている。江戸落語ならこういう描写はいらないのかもしれないが、上方落語としてはこういう余計な部分でうどん屋が商売上手であることを際立たせている。

「肌脱げ」は大阪方言での「を」がない言い方での「肌を脱ぐ」の命令形である。

はだをぬぐ【肌を脱ぐ】
①肌脱ぎになる。
②人のために力を尽くす。ひとはだ脱ぐ。

[14] このくだりがないのは落語家の世代差だけの問題ではないが、2015 年 8 月 14 日昼席の桂三四郎の噺にはこのくだりがなかった。『刻うどん』は時間の都合で、途中のやりとりが省略されることがしばしばある。

はだぬぎ【肌脱ぎ】
和服の袖から腕を抜き，上半身の肌をあらわすこと。片肌脱ぎと両（もろ）肌脱ぎがある。

大辞林 第三版の解説

いくら暑くても、肌を脱いだら、すなわち着物をまくったら素肌をさらすことになり、お湯の前なので大やけどをする可能性が高い。そういったことをそのまま真顔で返しても話は弾まないので、一言余計なことを足してみたのが、「へッ、大将、えらい古い言いぐさでんな。こらあ、弘法大師さんの頭にちょんまげ結うてた時分の言いぐさですよ」という返しである。「古い言いぐさ」であったかどうかについては、管見の及ぶ限り実際にそうであったかは分からない。ただ、「肌を脱ぐ」という表現自体は江戸時代より前にあってもおかしくはない。ただ、その古さの説明があまりに適当なのである。この点は 2.4 節でふれる。

2.4. 古い言いぐさ

2.4.1. 弘法大師さんの頭にちょんまげ結うてた時分

まずは、「弘法大使の誕生と歴史」[15]に従って、弘法大使の履歴を追ってみる。

774 年

真魚さまは、宝亀五年（774 年）六月十五日、讃岐国の屏風ガ浦（香川県善通寺市）でお生れになりました。讃岐の郡司の家系に生まれたお父さまは佐伯直田公、お母さまは玉依御前といいます。

791 年

み仏を拝むのがお好きな真魚さまは、またお勉強もよくできました。十四歳まで讃岐で勉強されましたが、十五歳の時、都（長岡）に出て、叔父さんの儒学者阿刀大足について文章などを学び、十八歳で大学に入られました。

しかし、大学で習う儒学を中心とする学問は、出世を目的とするものであり、世の中の困っている人を救うものではなかったので、次第に仏教に興味をも つようになりました。そして、度々奈良の石淵寺の勤操大徳を訪れて、み仏についての尊いお話をお聞きになりました。

793 年

世のため、人のために一生を捧げようとして、み仏の道の修行を始められた真魚さまは、まもなく大学を去って、大峯山や阿波(徳島県)の大瀧ガ嶽、あるいは土佐（高知県）の室戸崎などの霊所を求めて修行を続けられました。

[15] 高野山真言宗総本山金剛峯寺 http://www.koyasan.or.jp/shingonshu/kobodaishi.html

そうして、ついに親戚の反対を押し切って出家することを決心、二十歳の時、和泉国（大阪府）槙尾山寺において勤操大徳を師として 剃髪・得度し、名を教海とされたといわれています。のちに如空とあらため、身も心もみ仏のお弟子となられました。

795 年

二十二歳の時、名を空海とあらためられたお大師さまは、当時の名僧高僧にみ仏の教えを聞きましたが、どうしても満足することができませんでした。

835 年

お大師さまは、六十二歳の承和二年（835 年）三月二十一日、寅の刻を御入定のときと決め、のちのちのことを弟子たちにのべつくされました。御入定 の一週間前から御住房中院の一室を浄め、一切の穀物をたち、身体を香水で浄めて結跏趺坐し、手に大日如来の定印 を結び、弥勒菩薩の三昧に入られました。

御入定から五十日目に、お弟子たちはお大師さま御自身がお定めになった、奥之院の霊窟にその御定身を納められました。

921 年

お大師さまが御入定されてから八十三年後の延喜十八年（918 年）、寛平法皇（は、醍醐天皇に「お大師さまに大師号を賜りたい」と願い出られ、さらに観賢僧正も上表されましたが、勅許されませんでした。

延喜二十一年（921 年）十月二十一日の夜、天皇の夢枕にお大師さまがお立ちになり、「吾が衣弊くちはてり、願わくは宸恵を賜らんことを請う」といわれました。すなわち、「衣が破れているので、新しい御衣をいただきたい」とおつげになったのです。

そこで、桧皮色の御衣を賜ると同時に、「弘法大師」という諡号を賜りました。十月二十七日、勅使少納言平維助卿が登山し、御廟前にて、詔勅奉告の式が執行われました。

「弘法大師さんの……」のくだりを真に受けるなら、「肌脱げ」という古い言いぐさは上代からあったということを示している。「ちょんまげ結うてた時分」は、出家して剃髪する前のことである。793 年に出家した時に 20 歳、「ちょんまげ結うてた時分」はその前だから、真に受ければ上代からよく使われてきた上方での言い回しだということを語っていることになる。

2.4.2.　当時の髪型

ここまでうどん屋壱の会話を真に受けることをふまえて推測を進めてきたが、次なる問題が「ちょんまげ結うてた」をどうするかである。弘法大師の父は、地方官である郡司の職に

ある貴族である。また、『守貞謾稿』[16]の「上古髪の事」では、以下のように示されている。

> 上古は男女ともに髪を垂れたり。または曩(みずら)とて頂にて 2 つに取り分け、わがね結びて前ざまに推し垂れたることあり。

とある。こういった点から、弘法大師が青少年であった頃の髪型は総髪であったと推測できる。

> 総髪【そうはつ】
> 男子の髪形の一つ。月代(さかやき)をそらず全体に髪をのばし，後ろへたらすか髻(もとどり)を結ぶ形。平安時代の冠下の髻なども総髪だが，一般には江戸時代の学者，浪人，山伏などが用いた髪形をいう。
>
> 百科事典マイペディアの解説

> そうはつ【総髪・惣髪】
> ①男子の結髪の一。月代(さかやき)を剃(そ)らず，伸ばした髪の毛全部を頭頂で束ねて結ったもの。近世，主に儒者・医者や山伏などが結った髪形。そうごう。そうがみ。
> ②束ねたり，剃(そ)ったりしないで，髪の毛を全部後ろへなでつけて垂れ下げたもの。
>
> 大辞林 第三版の解説

> そう‐はつ【総髪／×惣髪】
> 男子の髪形の一。月代(さかやき)を剃らず、髪を全体に伸ばし、頭頂で束ねたもの。束ねずに後ろへなでつけて垂らしたものもいう。江戸時代、医者・儒者・山伏などが多く結った。そうがみ。そうごう。
>
> デジタル大辞泉の解説

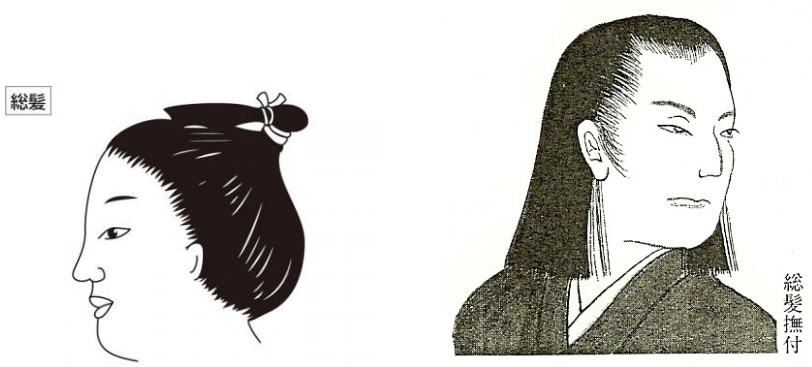

図 1：総髪
（左：デジタル大辞泉、右：黒髪の文化史より転載）

[16] 宇佐美英機校訂（1997：10-11）より引用。

「総髪」の説明中に出てくる「月代」「髻」については、以下に示す。

さかやき【月代】
①平安時代，男子が冠や烏帽子（えぼし）をかぶったとき，髪の生え際が見えないように額ぎわを半月形にそり上げたもの。つきしろ。つきびたい。ひたいつき。
②室町後期以後かぶりものを省く露頂の風が一般化する中で，成人男子が額から頭の中ほどにかけて髪をそったこと。また，その部分。庶民の間にも広く見られ，明治の断髪令当時まで続いた。

大辞林 第三版の解説

さかやき【月代】
男性の髪形の部分名称。中世の貴族たちが烏帽子や冠をつける場合，額に毛髪が見えぬように毛を抜いたのが始まりという。本格的に広く剃り上げるようになったのは戦国時代で，武士たちが戦場で兜をかぶると，熱がこもって気が逆上するため，頭上を丸く剃り気を抜いたというのが定説となっている。この風習は江戸時代まで続き，元禄期(1688‐1704)ころまでは頭上を広く剃り上げ，後期になるに従い剃り上げの部分が徐々にせまくなる傾向にあった。

世界大百科事典 第２版の解説

髻　もとどり
日本で行われた昔の結髪法の一つで，髪を頭上に束ねたもの，またはその部分をいう。元来，本取の意で，たぶさともいう。古くは中国，東北部に住した女真族の女性の結髪。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

たぶさ【髻】
髪を頭上に集め束ねた所。もとどり。

もとどり【髻】
〔「本取り」の意〕
髪の毛をまとめて頭の上で束ねた所。また，その髪。たぶさ。もとゆい。

大辞林 第三版の解説

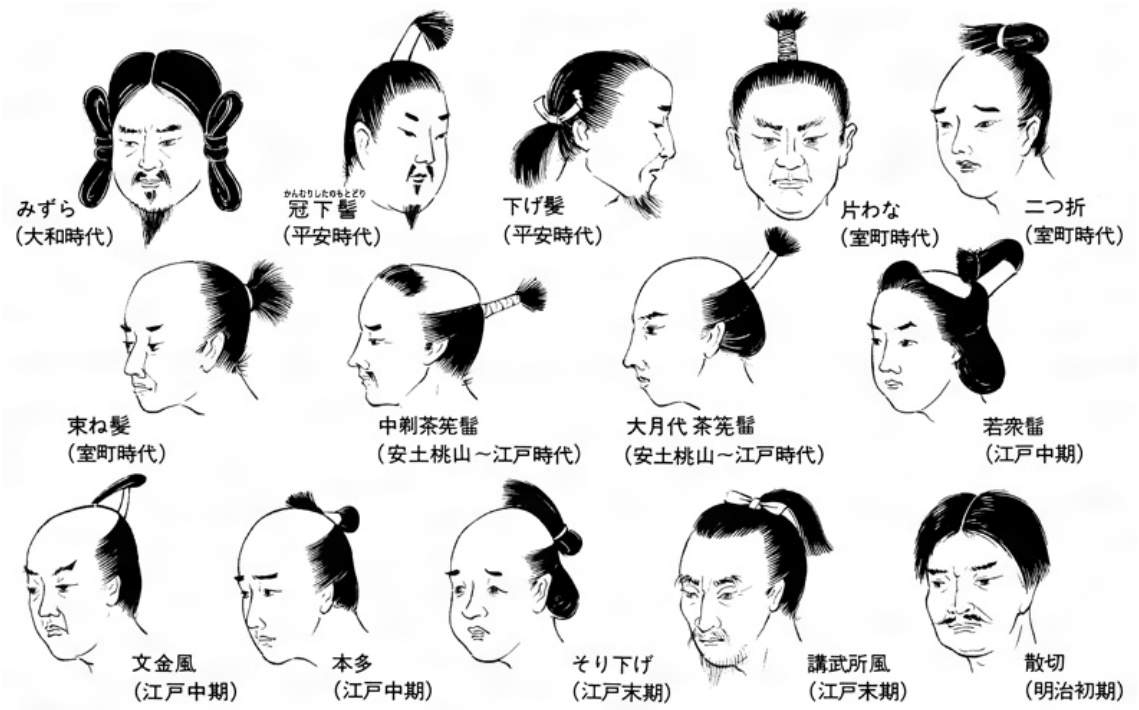

図 2：男性の髪型の変遷

日本大百科全書(ニッポニカ)より転載

ついで、「ちょんまげ」について確認しておく。

丁髷　ちょんまげ

江戸時代の男性髪型の一つで，額から頭頂部の髪を剃って月代 (さかやき) にし，残余の髪を束ねて前方に寝かせた髪型。月代はないが，類型は今日の力士にみることができる。語源は丶 (ちょん) の文字に似たところからと考えられている。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

丁髷【ちょんまげ】

江戸時代には男性老人の髷のこと。ちょんは小さい，少ないという意。髪が少ないため髷が小さいので丁髷と称した。明治以降男性の結う髷のある髪形の総称となった。

百科事典マイペディアの解説

ちょんまげ【丁髷】

江戸時代の男子の髪形の一。前額を広く剃（そ）りあげ，残った髪をまとめ後頭部にまげをつくったもの。まげの形が踊り字の「丶」に似ることからいう。現在では，関取の風俗として残る。

大辞林 第三版の解説

弘法大師が剃髪する前である上代には、ちょんまげという髪型はなかったことは男性の髪型の変遷からも確認できる。また、ちょんまげは年老いて髪が少なくなってしまってから結う髷である。その点では、弘法大師は、剃髪前は 10 代であり、月代を大幅に剃ってでもいない限り、ちょんまげにはなりえない。

ただ、現代語で言うところの「ちょんまげ」はいわゆる髷の総称であるため、織田信長のような茶筅髷でも、本多忠勝で知られる本多髷でも、時代劇でおなじみの銀杏髷でも、なんでもかんでも「ちょんまげ」と呼んでいる。だから、正式な名称を知らずに現代語の感覚で呼ぶのであれば、冠下の髻も茶筅髷のような感じでちょんまげと呼ぶことは十分受け入れられるであろう。茶筅髷、本多髷、銀杏髷の説明は図とともに示しておく。

図 3：茶筅髷、本多髷、銀杏髷（デジタル大辞泉より転載）

茶筅髷　ちゃせんまげ
男女の髪形の一種。髷形が茶をたてるときに用いる茶筅の形に似ているところから名づけられた。男性の場合は、室町時代に日夜戦乱が続くようになって、髪の蒸れるのを防ぐために頭上に月代(さかやき)をあけることになり、戦国時代に入って月代はいよいよ大きく、露頂の風潮が一般化するにつれて、後頭部に髪を束ねて元結(もとゆい)で留め、その毛先を切ったが、その形が当時流行の茶の湯の茶筅に似ているところからよばれた。

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

ほんだ‐まげ【本多×髷】
１　《本多忠勝の髪形から広まったという》江戸時代、明和・安永（1764～1781）のころに流行した男子の髪形。中ぞりを大きく、髷を高くし、7 分を前、3 分を後ろにしてしばったもの。ほんだわげ。

デジタル大辞泉の解説

いちょうがしら【銀杏頭】
江戸時代の男の髪形の一。髷（まげ）の先をイチョウの葉のように平たく広げたもの。

大辞林 第三版の解説

今世男子髪、おほむねかくのごときなり。

けだし月代を多く剃りて髪を少なくするあり、また月代を少なくして髪多きあり、鬓の高低あり、髱（たば）の寛急あり、髷の大小長短あり、その形種々数十種あり。図し尽すべからず。

貴人は髪多く月代少なく、鬓高く髷大なり。下輩はこれに反する多し。

今三都とも市民の髷に銀杏形と云ふもの多し。大いてう、小いてう、銀杏崩し、清本いてう等、種々の名あり。

『守貞謾稿』「男扮篇」[17]

ここまで真に受けるという前提で進めてきたが、「ちょんまげ」については、あくまで現代語の感覚ではという話である。『刻うどん』が作られたのは、18 世紀だと推定できる。したがって、この頃には現代語のようなちょんまげの語感はなかったはずである。しかし、明治以降には髷の総称としてのちょんまげが根付いていたようなので、口承によって伝わっていたことばが時代の変化に対応して、現代人にでも分かるように言い換えたのかもしれない。ただ、この部分の内容は、そもそも「ほんまでも嘘でもどっちでもいい」ということは言うまでもないことである。

2.5.　　袷着

「暑けりゃ肌脱げ」に対して、うどん屋壱がうまいことあしらいつつ、うどんを作り続けるわけだか、再び清八は「うどん屋、暑いか？」という無駄なからみを仕掛けてくる。さすがに「暑い」と答えると先の繰り返しとなるので、うどん屋壱は「へッ、ええかげんでおます」と答えて無難に済ませようとした。そこに矢継ぎ早に、清八は「袷、着ー」と。さすがに参った感じで、うどん屋壱は「堪忍しとくんなはれや」となった。この後、ようやくうどんを注文することになるので、注文前のいじり、からみはここまでである。

「袷、着ー」は「アワセ　キー」である。「キー」は、「着る」の大阪弁における連用形を長音化した形での命令形である。袷については、和服に堪能なものには問題なく理解できる語彙であるが、そうでなければ頭にことばが入った後で瞬時の映像化はできないだろう。

袷　あわせ

裏をつけて仕立てたきもののこと。表と裏との布地の間に空気層をつくって保温効果を高めた。着用時期は単（ひとえ）と綿入れの中間期。昭和初頭以来一般に綿入れを着用しなくなったが，江戸時代はきものには着る時節の定めがあり，袷は 4 月 1 日のころもがえから 5 月 5 日の端午の節供前日まで，それ以後は単となり，9 月 1 日から 9 日の重陽の節供前日まで再び袷を着た。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

[17] 宇佐美英機校訂（1997：33-34）より引用。

上述の説明から分かるのは、袷とは単よりも厚く、綿入りよりも薄い着物だということである。

単　ひとえ
単物 (ひとえもの) ともいい，裏地のつかないきもののこと。江戸時代には麻地の物を帷子 (かたびら) といい，絹や木綿地の物を単と呼んだ。夏物の薄生地には，平紹，紹縮緬 (ちりめん) ，紋紗，レース，麻縮，お召などがあり，ほかに訪問着として絵羽染，紋付用の単重 (ひとえがさね) もある。

綿入れ　わたいれ
裏地をつけ，中に綿を入れた防寒用の衣類。古くから着用されていたが，奈良・平安時代の綿入れは絹綿が使われた。木綿が輸入されてから綿布と木綿綿が普及し，江戸時代末期には布子と称し，庶民に広く着用された。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

江戸時代の武家社会では年 4 回の更衣(ころもがえ)があったとされ、庶民もこれに従っていたとされている[18]。

・4 月 1 日から 5 月 4 日までが袷(あわせ)という裏地付きの着物
・5 月 5 日から 8 月末までは帷子(かたびら)という裏地なしの単衣仕立ての着物を着用
・9 月 1 日から 9 月 8 日までの 1 週間程、また袷を着用
・9 月 9 日から 3 月末までは綿入れ（表布と裏布の間に綿を入れた着物）を着用

ここから、『刻うどん』は夏の噺であることが推測できる。暑いから単衣を着ているというのに、「暑いか？」という質問に「ええかげんでおます」と答えたら、より暑苦しくなる袷を着ろと言ってきた。それに対して「（袷を着させて余計に暑苦しくさせるとはどういうことや、それこそお客さんええかげん）堪忍しとくんなはれや」というのがうどん屋壱の返答であった。そして、うどん屋壱は、「ただからかってるだけでなく、そろそろうどんを注文してくれ」という意志を表明して、うどんを注文させる流れにもっていくのである。このあたりの駆け引きでもうどん屋の商売上手を際立たせている。それなのに、1 文ごまかされてしまうという布石として、ここでのやりとりは必要であったのではないかと筆者は考えている。

3. 結語

たわいもないくだり、時間にすればたかだか数十秒のやりとりにこれだけの紙数を費やし

[18] 私の根っこプロジェクト「日々是活き生き　暮らし歳時記」http://www.i-nekko.jp/sahou/kirumono/koromo/

てきたが、このくだりがあることによって以下のことが分かるということが確認できた。

(1) うどん屋壱の商売上手さを際立たせ、そのうどん屋壱を手玉にとって後に勘定をごまかすための布石となっている。
(2) 「暑いか」に対する「肌脱げ」と「袷着」によって、夏と言わずに季節が夏であることを示している。

なお、『時そば』では(1)は「ひたすらほめちぎる」に変えられた。それによって、客が始めからだますつもりであることを際立たせるが、そば屋が引き立つことはない。(2)については、特に季節にふれることはない。宝暦の頃から、屋台に風鈴をつけていたようだが、それは夏だからというわけではなかった。これらの点をふまえると『時そば』の方が『刻うどん』より寄り道がなく、脇役を際立たせない噺であるということができる。

また、このたわいもないくだりは、ことばを理解できなくても、清八とうどん屋壱が丁々発止ではない冗談交じりのやりとりをしているという状況さえ分かれば、このうどん屋壱が商売上手であることを聴衆は理解できる。ただ、「袷着ー」あたりで若い世代だとすっと頭に入らなくなる可能性は高い。だから、ここをとばす落語家も増えているのかもしれない[19]。しかし、このくだりがあって『刻うどん』はひつこさだけでない噺であることを示している気がする。ただ、それは筆者の主観的解釈に過ぎないが、上方落語のステレオタイプであるひつこさ以外にも上方落語にはそれなりの特徴があると述べることで、このエッセイのしめとしたい。

追記

『時そば』は Time Noodles と英訳されている。soba や udon がどこまで通じるのかは分からないが、通じないとすれば『刻うどん』は Time wheat noodles、『時そば』は Time buckwheat noodles と訳し分ける必要があるのだろうか。私には分からない。

謝辞

* 2013 年に落語芸術協会の協力を得て、大東文化大学に瀧川鯉昇、桂かい枝の両名をお招きして「東西落語会」を開催できた。そこで得られたことを小出しではあるが、少しずつさまざまな形で原稿にしている。まずは、協会と両名に感謝の意を申し上げる。そして、準備を進めてくれた学生諸氏、当日足を運んでくれた卒業生にもお礼申し上げる。末筆ながら、匿名査読者にもお礼申し上げる。

参考文献

大原梨恵子（1988）『黒髪の文化史』東京：築地書館

[19] そもそも『刻うどん』や『時そば』は、時間の都合でマクラの部分を省略する落語家は多い。

桂枝雀（1996）『桂枝雀のらくご案内　枝雀と 61 人の仲間』東京：ちくま文庫（『桂枝雀と 61 人の仲間』1984 年　東京：徳間書店）

桂米朝（2002）『私の履歴書』東京：日本経済新聞社

桂米朝著、豊田善敬・戸田学編（2004a）『桂米朝集成　第 1 巻　上方落語 1』東京：岩波書店

桂米朝著、豊田善敬・戸田学編（2004b）『桂米朝集成　第 2 巻　上方落語 2』東京：岩波書店

喜田川守貞著、宇佐美英機校訂（1997）『近世風俗志―守貞謾稿 (2)』東京：岩波文庫

興津要（2004）『落語　笑いの年輪』東京：講談社学術文庫

福盛貴弘（2016）「江戸落語と上方落語との対照　― 東西落語会座談会をふまえて ―」『外国語学会誌』45

細川英雄（1981）「「軽口初笑」翻刻-下-」『信州大学教育学部紀要』45：294-284.信州大学教育学部

武藤禎夫編（1979）『噺本大系』9 巻　東京堂出版

執筆者紹介
氏名：福盛貴弘
所属：大東文化大学外国語学部
Email：ICG01649@nifty.com